

私が受けとったもの、そして渡したいもの

“From My Superior” and “To Young People”

豊島陽子 Yoko TOYOSHIMA

どちらかといえば、ものごとを悲観的にとらえる癖のある私ですが、仕事の上で、女性であるがゆえに差別を受けたと感じたり、不快な思いをしたりという経験はなく、とても恵まれてきました。仕事といってもずっと大学で過ごしてきたので、社会経験は非常に限られたものですが、これまでに会った方々から受けた影響は大きいと感じることが多く、思うところを綴ってみようと思います。

小学校、中学校は共学校でしたが、算数、理科、数学を教わったのは、すべて女性の先生でした。もう40年も昔のことですが、6人ほどの先生方のお名前と、今の自分の歳よりも若いその頃の先生方の顔が目に浮かびます。好きな科目ではありましたが、それ以上に先生方のお人柄や個性に惹かれ、社会で働く女性としても憧れをいただいていた。女子高、女子大に進み、共学校よりは女性教員の比率が高く、やはり魅力的な先生がいらしたこともあります。同時にまた、優秀な多くの友人に囲まれ、女子は理数系が弱いとか不向きであるというようなことを感じたことはありませんでした。井の中の蛙であったのかもしれませんが、今、振り返ってみると、押しつぶされそうになる要因から隔離されていたことで、主体的に好きなことを選択できたというメリットは大きかったと思います。

大学で卒業研究を始めてから、自分の手で実験をして自然の姿を紐解いていくことの面白さに嵌りました。卒業研究と修士課程の指導教官は女性の教授でしたが、自由な発想に学ぶところが多くありました。先輩には大学や研究所で研究職に就いている方も多く、研究を続けたいという気持ちに迷いはありませんでした。博士課程では共学の研究室に進学して男性の指導教官につきましたが、自主性を重んじ、男女の区別なく指導と支援をして下さいました。ポスドクとして過ごした米国の研究室では、研究室の構成員の男女比はほぼ半々でした。ポス(男性)は、常に12人以上もいた研究室の面々に対し、忙しくて滅多に顔を合わせる機会がないにも

かわらず、個々の性格に応じて異なる対応をとっていました。少々鼻っぺしの強い者には適当なパンチを加えて闘争心をあおり、自信のない者には勇気やチャンスを与える、というように、若い人を引っ張っていく絶妙な匙加減?に感銘を受けました。一方、2カ月ほど滞在した英国の研究所では、老眼のポスが自ら実験を行い、共通のストック試薬がなくなれば自分で作ってラボ全体に供するというぐあいで、老若男女に関係なく研究に向き合う研究者の姿勢の原点を見た思いでした。

教員として女子大学に10年ほど勤め、その後、男子学生のほうが多い大学に移ってからそれ以上の年月が経ちますが、教員も学生も、男女の違いよりも個人の関心や考え方、研究スタイルの違いのほうが大きいように思います。研究において個人の特性が尊重されるのは大学のありがたいところですが、実際には、教員は研究対象以外のことに奔走することが多く、フレキシブルな対応や人とのコミュニケーションは重要です。現在の職場はリベラルな気風も強く、また周囲に配慮のあるスマートな方々ばかりで、不自由や困難を感じることはありません。いろいろな才能を発揮して社会的に活躍されている方も多く、比べて自分のキャパシティの低さを感じることは多々ありますが。

これまでに多くの方に出会い、いろいろなものを受け取ることができ、とても感謝しています。理系の研究者や教師の良きロールモデルであったのも事実ですが、男女の別なく真摯に向き合って指導やサポートをいただいたことのほうが大きいのではないかと思います。多様な生き方や価値観の中で、自分らしい生き方を選択して社会に参画することはなかなか難しいことですが、若いころに受けたものにより、私は自分の道を選ぶことができたのだと思います。今、若い人々のひとりひとりに向き合い、個人を尊重してその特性や能力を引き出すのを助けることで、その思いを次世代に渡していきたいと思っています。そして、若い人々に元氣と希望を与えていければと思っています。



豊島陽子 Yoko TOYOSHIMA

東京大学大学院総合文化研究科
教授
東京大学大学院理学系研究科博士課程中退
専門は生物物理学
E-mail: cyytoyo@mail.ecc.u-tokyo.ac.jp